



2024 年

10 月 第 3・4 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 10 月 20 日 : ヨハネ福音書 7 : 37 - 38 .
8 : 12 .

『 イエスの仮庵祭 』

・ 10 月 27 日 : マタイ福音書 18 : 10 - 14 .

『 天使と羊 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

《 イエスの仮庵祭 》

ユダヤ暦（陰暦）の祝祭で、最大のものは過越祭ではなく仮庵祭です。太陽暦の9月から10月頃に祝われます（今年は10月17日～23日）。古代史の出エジプトでイスラエルの民が40年をかけて、荒れ地を通過する際に繰り返し簡素な仮庵を壊しては建て直し、そこを仮住いとしながら移動生活を続けたことを思い起こし記念するための祭りです。

庵の素材は、オリーブやミルトス、ナツメヤシの余分な枝を組み合わせ、建造しました。後の世の仮庵祭の期間中、こうした民族の記憶を辿り、神殿の庭や広場、自宅の庭などに簡易な庵を建ててそこで時を過ごしました。祭りの期間は民族意識が最も高まる時でもあり彼らの歴史上、他民族との間で様々な軋轢が生じ、時として紛争に発展したこともありました。

また、一つ間違えばイエスの受難（処刑）は過越祭にではなく、この仮庵祭のさ中に起きていたかもしれないのです。

十字架の前年、公生涯最後の秋の仮庵祭でイエスはユダヤの権力者から危険視され摘発されて、排除されようとしています。「私の時はまだ来ない(7:6)」と語るイエスを、「人々は…捕えようとしたが、手をかけることが(7:30a)」できません。祭司長やファリサイ派もイエスを捕えるために下役らを遣わしますが、見つけ出すことができません。そうこうするうちに祭りの最終日が来ます。イエスは神殿で大きな声で語ります、

渇いている人は誰でも、私のもとに来て飲みなさい私を信じる者は、聖書が語ったとおり、その人の内から生ける水が川となって流れ出るようになる。(7:37-38)

イエスは、自分を信じる者が今後「受けようとしている霊(7:30)」の何たるかをここで語っているのです。重要なのは祭りの“民族意識の高揚”ではなくイエスを信じる個々人が悟るべきこと、その人自身の信仰における“渇き”、これに気づき癒されることです。さらにイエスは言われます、

私は世の光である。私に従うものは闇の中を歩まず、命の光を持つ。
(8:12)

こちらにも民増意識の高揚ではなく、個々の人間が生ける神キリストとの出会いによって与えられる新しい命が感受し保持することになる“光”について語られています。こうして神キリストを知ることによって、断絶していた神と人、創り主と被造物との間の本来あるべき正しい信仰がよみがえります。さらに、これを受け継ぐことになる者と、そうでない者との分岐の時がここに流れているようです。

《 天使と羊 》

譬えに出て来るこの羊は迷える“小羊”ではなく、成長した羊です。迷い出たとたん、ちぢこまり野獣の餌食になるわけではありません。迷い出た理由は“草”です。自然界には家畜小屋にはない、ありとあらゆる植物が生い茂っています。空腹な若者が食堂街を歩いているのと同じです。時期はおそらく夏から秋にかけての実り豊かな季節でしょうか。群れから逸れた一匹の羊が森の中に独り進み出ています。といってもそこは腹を空かした羊にとっては願ったり叶ったりの場、地上の樂園に足を踏み入れたに等しいのです。けっして心許ない哀れな羊ではありません。むしろイエスの譬えに出て来るあの“放蕩息子”とよく似た羊です。

さて羊の飼い主はというと、彼は残りの九十九匹を山に残して、迷い出た（と思しき）一匹を捜しに行きます。羊には群れる性質があるので、残りの九十九匹はきっと山中のどこかの荒野でまとまって待機しています。というのもこれらの羊は後で「迷わずにいた残りの九十九匹」だったことが確認されるのです。あの放蕩息子の譬えの中にも父親の許を離れず真面目に仕事を手伝った兄がいたことが語られています。

さて、兄ではなく放蕩息子のほうに似ている一匹の羊はというと、こちらは山林へ進出して草木は食べ放題です。飼い主にとってこの羊がもし見つければ、「死んでいたのに生き返った」放蕩息子（ルカ福音書15：32）に等しいのです。

もっとも、この羊と放蕩息子には大きな違いもありました。というのも「死んでいたのに生き返った」放蕩息子は旅先で飢饉に遭遇し、悔い改めて親元に帰郷しましたが、羊は群れに戻って来たのではなく、羊飼いに見つけ出されるのです。

けれども譬えに出て来る羊飼いと放蕩息子の父親は、どちらも失われたものが元に戻って来たことをこの上なく喜んでいます。神と人が再び結び合わされることが“造り主(=神)”の切なる願いであることがこれらの譬えを通して語られているのです。

聖書にはこれらの羊にはそれぞれ、無名の(守護?)天使がついており、神の許から使わされ、天と地を行き来しながら現状を把握しているともとれる記述となっています。詳細は不明です。因みに羊は“人間”の譬えです。人間には自分の天使の存在の把握も確認もできてはいません。大工ヨセフや東方の博士らの夢に出てきた天使のように、いつかどこかで私たちを正しい道に導いてくれているのかもしれない。